

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 14 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520474

研究課題名(和文) 消滅に瀕する満洲語の社会言語学的研究 ドルブットモンゴル族コミュニティ言語と比較

研究課題名(英文) Sociolinguistic studies on endangered Manchu language- A Comparison between Dorbed Mongolian Community language

研究代表者

包 聯群 (bao, lianqun)

大分大学・経済学部・准教授

研究者番号：40455861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本課題は中国黒龍江省三家子村の満洲語の語彙、文法及び物語を記述した。また満洲語はモンゴル語と同様に中国語と接触を起す際、形態的、文法的に簡略化現象が起きることがわかった。即ち満洲語とモンゴル語は類似するメカニズムを見せることが確認できた。三家子満洲族小学校の満洲語習得実態の追跡調査を行い、満洲語を継承していくことに繋がった。満洲語がコミュニケーションの役割を失い、これは危機言語が歩む共通のプロセスであることがわかった。

研究成果の概要(英文)：The Project recorded Manchu language vocabulary, grammar and stories in San Jia Zi (The Three Houses, Ilan boo in Manchu) Manchu village of Heilongjiang Province. It also clarified the morphological and grammatical simplification appeared in Manchu language as the result of its contact with Mongolian and Chinese. That is to say that when Manchu language had contact with Mongolian and other languages, changes of similar mechanism occurred in Manchu language.

The project also conducted follow up investigations of the Manchu of language learning in Manchu elementary school in San Jia Zi village which will be beneficial to the inheritance of the language. Manchu language has lost the role of "communication", which is an indication of the process an endangered language usually goes through.

研究分野：言語学、社会言語学

キーワード：言語維持 言語継承 継承言語 言語政策 言語接触 満洲語 少数言語 満洲語学校教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、社会言語学の視点から満洲語を研究する初めての挑戦である。主に中国黒龍江省における消滅の危機に瀕する満洲語を研究の対象とし、ドルブットモンゴル人コミュニティ言語との比較を通して消滅に瀕する満洲語のメカニズムを解明することである。

(2) 本研究に関連する国内・国外の研究には、中国において、『満洲族の言語や歴史文化』(趙阿平 2006)、『中国危機少数民族言語調査研究—満洲語の現存状況調査報告』(朝克、趙阿平 2002)、『満語口語研究』(恩和巴圖 1995)、『満語語法』(季永海など 1986)などがある。また、黒龍江大学満洲語文化研究センターと香港大学饒宗頤学術館は満洲族文化緊急調査開発協力協定書を結び、現存する満洲文字文献の翻訳、研究、満洲語の次世代への教育などの研究をしている。日本においては九州大学の久保智之教授の三家子村に関する調査報告(新疆の錦伯語との比較など)や東京外国語大学の風間伸次郎教授による満洲—ツングース系言語に関する言語調査論文や著書が出版された。しかし、ほとんどの研究は社会言語学の視点を取り入れた分析を行っていない。包聯群(2004)は泰来県ウンドル村の満洲語について記述し、社会言語学の視点からバイリンガル動詞の存在を明るみにした。また、2010年7月に申請者(包)は富裕県の三家子村に赴き、予備調査を行った。その結果、満洲語を流暢に話せる話者3人が高齢(当時最高齢者85歳)となり、新たな視点による早急の研究が必要であった。2006年から「三家子」(ilan boo)村の「満洲族小学校」において週二回程度の満洲語教授が始められており、2010年の調査時点で、生徒49人全員に満洲語を学ばせていた。しかし、お互いに会話できる状況まで習得していなかったことがわかった。また、黒龍江大学では2006年から満洲語専攻の学生

を二年間に1クラス(16人)募集し、満洲語を教授していた。

(3) 包(2011)は黒龍江省におけるドルブットモンゴル人コミュニティ言語の特徴を明らかにし、言語接触によって形成されたバイリンガル動詞、バイリンガル形容詞について社会言語学の視点から分析を行い、アジアにおいて言語接触の事例が少ない中、モンゴル語と中国語の接触事例を提供し、言語接触に関する理論的な枠組みの構築に貢献できた。泰来県のウンドル村の満洲語にもバイリンガル動詞乃至多言語(モンゴル語+中国語+満洲語)動詞も存在していたことがわかった。したがって、包(2011)の研究手法や分析手段を取り入れた結果、満洲語にもドルブットモンゴル人コミュニティ言語と類似するいくつかの現象が存在していることがわかり、これらについてさらに詳細な調査や分析が必要であると判断した。

(4) ドルブットモンゴル人コミュニティ言語のデータや泰来満洲語のデータがすでに動詞の借用が可能であることを証明し、Thomason and Kaufman(1988)、Thomason(2001)の動詞の借用が可能であるという主張の正しさを裏付けている。また、言語接触によって語構成の簡略化が発生する(Harris and Campbell 1995, Britain 2002)が、包(2011)ではそれを証明している。ただし、満洲語口語ではどのような状況であるのか。これについてさらに調査する必要がある。これらの主張が成立すれば、言語接触によって形態の簡略化が可能であることを証明し、アジアにおける言語事例を提供することによって、言語接触理論の構築に大きく貢献できる。

(5) 申請者は今までのドルブットモンゴル人コミュニティ(モンゴル語と中国語の接触によって構成された)言語や満洲語等に関するフィールド調査の経験を踏まえ、言語接触による、あるいは言語が消滅に瀕する際に起こる形態の簡略化現象、語彙や語構造の大量

の借用現象等深層までの変化が発生している現象を考察し、描写記述を行う作業のみに止まらず、先行研究の Britain (2002)、Thomason (2001)、Dorian (1978,1986) 等を参考にしつつ、ドルブットモンゴル人コミュニティ言語との比較を通じて、消滅に瀕した満洲語のメカニズムを解明しようとした。

2. 研究の目的

(1) 黒龍江省富裕県、泰来県 (2003 年の調査データに基づく) の満洲語口語を記述し、その類似点と相違点を明らかにする。

(2) ドルブットモンゴル族コミュニティ言語 (包 2011) と比較をし、語構成には言語接触による簡略化現象があるか (泰来県の満洲語口語にある) どうか。社会言語学の視点から満洲語とモンゴル語が周辺言語と接触を起こす際、類似するメカニズムを見せるかどうかを解明する。

(3) 言語意識調査を実施し、アイデンティティの特徴を解明する。

(4) 三家子満洲族小学校の満洲語習得実態の追跡調査を行い、継承言語概念の発信を行う。

3. 研究の方法

本研究は、まず語彙リストや文法事項インタビュー調査票を作成し、中国黒龍江省の満洲語口語について調査を行った。その際、『アジア・アフリカ 言語調査票 (下)』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編 1967 年) とその他の単語や文法リストも使用し、同時に物語や自然談話の録音・録画も行った。また、学校の満洲語の授業にも参加し、満洲語の習得状況について調査を行った。具体的には、(1) 黒龍江省の満洲族の言語・文化活動等に関するあらゆる資料・情報の収集を行い、泰来県の満洲語口語資料を整理した。(2) 三家子村の高齢の満洲語話者四人とその他の話者一人について語彙リストと文法特徴を含む作例文によるインタビュー調

査 (録音・録画) を行った。(3) 話者同士の会話録音や個別の話者に物語を語ってもらい、録音を行った。(4) 「三家子満族小学校」の同意を得て満洲語の授業に参加し、その習得状況を記録した。(5) 社会人向けの満洲語会話教科書の作成準備をし、内容に関する録音と録画も行った。さらに他の地域の満洲小学校の状況も観察し、周辺情報を収集し、継承言語の概念を発信した。

4. 研究成果

(1) 先行研究を参考にし、泰来県と富裕県で得られたデータに基づき、満洲語口語の音韻的・形態的・統語的な特徴を地域ごとにそれぞれ記述をした。

(2) Matras and Bakker (2003:2-7) で提案された言語の構造プロファイル (Structural Profile) に基づき、ドルブットモンゴル人コミュニティ言語との比較をしながら、地域ごとの満洲語口語の構造プロファイルを作成し、言語接触による相違点を記述し、満洲語口語の特徴を解明した。

(3) 音韻的には、例えば、「太陽」という単語について、三家子村の満洲語話者 A、話者 B と話者 D は同様な発音している (ʃun) が、話者 C と話者 E は異なる発音している (sun) 現象が生じている。語彙的には、例えば、「雷がなる」についてみると、話者 A は「kunzən tandəm」と言っているのに対して、話者 B は「agdun tanən」と言い、話者 C と話者 D は話者 B と同じ語源の「agdun tanəmbe」と「agdun」を使用しているが、話者 E はまったく別の語源の「telkən guanbie」を使用している。当表現において、すでに三つの言い方が生じていることがわかった。また、基本語彙 500 を調査したところ、そのうちの 60-70 程度の単語の発音が話者 A と話者 B が多少異なっていた。同じところに居住し、そして兄弟・姉妹であるにも関わらず音韻的・語彙的に区別があった。

(4) 言語接触による語彙借用、文法要素

借用、ないし動詞の借用もあり、バイリンガル動詞とバイリンガル形容詞を構成することが確認できた。これは満洲語と中国語の接触により言語構造の「深層改造」まで行われている現象である。この点でもドルブットモンゴル人コミュニティ言語の構造と同様であると言える(詳細について包 2015 を参照)。

(5) さらに形態の簡略化現象が起きていることがわかった。この点においてもドルブットモンゴル人コミュニティ言語と同様である。例えば、文法要素において、満洲語の文法要素を使わず、また中国語からの借用語も使用せず、二つの文のみを簡単に並べるといった構造的に簡略化された現象が見られる。話者 E の場合、「あなたは行かなくても私は行く」という文において、文法要素を全く使わず、「šii yawxu yawxu bii yowmee (「あなたは行かない、行かない、私は行くよ)」という。即ち、文法要素である「…でも…」を全く使用していなかったのである。

(6) 語構成において話者による「造語」が可能である(自分が言っている言葉が正しいと思ひこむ現象が現れる)ことが確認できた。この点において、消滅に瀕したメキシコのアヤパネコ(Ayapaneco)語も同様であり、一つの言語が消滅に瀕する際に現れる共通の現象であると言える。例えば、同じ単語であっても話者ごとに異なる表現を用いることがある。中国語の起源と思われる「dong (洞) -gu」(あな)という単語についても話者 A の場合、「kengzi (坑子)」という中国語の別の借用語を使用している。話者 B の場合、逆に満洲語起源の語彙 sang を使用していることがわかった。また、「けんか」という単語に関して、語の第一音節 [bu-] のみが同様であった。以上のように話者間において、かなりの差が出ていることが明らかになった。

(7) 解釈型による単語を作ることもある。例えば、話者 A の語構成の方法をみると、「解釈法」を使用していることがわかる。即ち、

「直訳+中国語単語」のような語構成のパターンである。「かま」(バケツ)という単語について、話者 A は「muko (水)」、「shao (焼)」という「水を焼く」の解釈型の語構成(OV)を通じて一単語「かま」を形成していることがわかった(包 2015 を参照)。

(8) 同様な文法要素について、話者ごとに異なる表現をする現象が見られる。即ち、満洲語の表現を使う話者がいれば、そのまま中国語から取り入れる話者もいる。

(9) 言語意識に関するインタビュー調査では、話者のアイデンティティの特徴を解明できた。アイデンティティを維持することについて、年代ごとに異なる傾向が見られた。年配者は満洲人の伝統的な言語と文化を継承させる努力をしても、若者はそれに応じないことがわかった。即ち、言語の維持が難しいであることを反映している。東北地域におけるモンゴル語のように大学受験、進学などに優遇政策を実行すれば、その可能性があることがわかった。これは消滅に瀕する言語の共通の問題でもあり、普遍性があると言える。

(10) 満洲語を流暢に話せる話者について 24 時間の追跡調査を行うことによって、日常生活において満洲語がほぼ使用されていないことを確認できた。このような調査を通じて消滅に瀕する満洲語母語話者の言語生活の実態を解明することができた。

(11) 三家子満洲族小学校の満洲語習得実態の追跡調査を行った。主に児童の満洲語の習得状況(語彙や使用状況など)について授業参加の形で毎年追跡調査を行い、消滅に瀕した言語を継承する際のプロセスを記述した。上述したように、進学する際、様々な優遇政策が必要であることがわかった。これはその他の言語復興活動においても重要である。

(12) まとめてみると、満洲語は「コミュニケーション」を取る手段としての役割をすでに失い、これはメキシコのアヤパネコ(Ayapaneco)語に類似する。そして両方とも

消滅に瀕する言語であり、日常的に使用されなくなっている言語である。したがって、上述の「造語」現象（話者間における単語の違い）及び「コミュニケーション」の役割を失うなどの現象は消滅に瀕する言語が歩む一つの共通のプロセスであるという結論を得ることができる。三家子村の実態をみると、言語学者のダニエル・サスラック（Daniel Suslak）氏の調査事例はまさに「死」に瀕する言語の話者が「造語」が可能であることを証明している。

(13) 本課題は、中国社会言語学界に注目され、国際会議での発表などを通じて、言語接触の研究に貢献でき、「継承言語」の概念を中国へ向けて発信し、日本及びアジアの言語継承・復興の研究にも事例を提供できた。

(14) 本課題は、社会言語学の視点を取り入れた新たな研究として、消滅に瀕する満洲語口語の語構成、メカニズムを解明でき、危機言語とされるメキシコのアヤパネコ（Ayapaneco）語と類似点も多くあることが証明できた。即ち、消滅に瀕する言語のメカニズムの解明にある程度貢献でき、さらに危機言語の維持、保護や継承及び復興にもある程度参考になる事例を提供できたと言える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

(1) 包聯群、「消滅の危機に瀕する満洲語の社会言語学的研究—中国黒龍江省を事例として—」、『現代中国における言語政策と言語継承』第2巻（包聯群編著）、査読無、三元社、2015年（予定）、124-173頁。

(2) 包聯群、「経済言語学の視点からみる言語景観—アメリカのチャイナタウンと日本の中華街の比較」、『大分大学 経済論集』（第66巻第5号）、査読有、2015年、85-116頁。

(3) 包聯群、「コミュニケーションの中で新たに作られた言語—モンゴル語と中国語の接触を事例として」、『第2回アジア未来会議

論文集』（AFC2014、USBメモリ電子データ373、A4：8枚）。査読有、2014年8月。公益財団法人渥美国際交流財団（関口グローバル研究会）。

(4) 包聯群、「言語使用、言語意識と言語経済」（中国語）、蘇金智・夏中華編『言語、民族と国家』。北京：商務印書館、査読有、2013年11月。204-225頁。

(5) 包聯群、「民族言語におけるバイリンガル動詞—北方少数民族コミュニティ言語における蒙漢と満漢バイリンガル動詞を事例として—について—」（中国語）、『民族語文』（No.202）、査読有、2013年9月、中国社会科学院。75-81頁。

(6) 包聯群、「モンゴル人コミュニティ言語維持、言語継承と言語復興」、包聯群編著、『現代中国における言語政策と言語継承』第1巻、査読無、2013年8月、47-94頁。三元社。

(7) 包聯群、「日本の言語計画」（中国語）、『中国言語戦略』創刊号（中国言語戦略研究センター・南京大学編集）、査読有、2012年、188-198頁。上海訳文出版社。

〔学会発表〕（計20件）

(1) 包聯群、「少数言語の保護と継承について—モンゴル語と満洲語を事例として、そのモデル化の可能性を考える—」、第4回日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承—少数言語を中心に考える」にて、科研費補助金 基盤研究B（海外学術調査）、基盤研究C（代表 包聯群）による主催、2014年09月15日、学習院大学（東京都目白キャンパス）北2号館10階第1会議室。

(2) 包聯群、a.「中国黒龍江省三家子村の満洲人の言語とその継承実態」、b.「中国黒龍江省におけるモンゴル人の言語と継承・復興」（ポスター発表）。Linguapax ASIA Symposium「危機言語復興ネットワーク—その意義と今後の可能性」、学習院大学東洋文化研究所主催、2014年09月13日、学習院大学（東京都目白キャンパス）中央教育研究棟12F 国

際会議場。

(3) 黄行・包聯群、Endangered Languages Networking - Values & Benefits for the Future、Linguapax ASIA Symposium 「危機言語復興ネットワークその意義と今後の可能性」、学習院大学東洋文化研究所主催、2014年09月13日、学習院大学(東京都目白キャンパス)中央教育研究棟12F国際会議場。

(4)包聯群、「満洲語の書記体系と規範化について」(ポスター発表)、科研費プロジェクト「書記伝統における標準規範の歴史的東西比較研究」(研究代表者原聖、平成25年-27年)。国際シンポジウム、2014年09月5-6日、内蒙古大学蒙古学学院会議室(中国・フフホト市)。

(5)包聯群、「言語景観からみられる言語の多様性」、『第十二回都市言語研究国際シンポジウム』、南京大学・内蒙古大学主催。2014年09月2-4日、内蒙古大学蒙古学学院会議室(中国・フフホト市)。

(6)包聯群、「コミュニケーションの中で新たに作られた言語—モンゴル語と中国語の接触を事例として—」、『第2回アジア未来会議』(AFC2014)、公益財団法人渥美国際交流財団(関口グローバル研究会)主催。ウダナヤ大学共催。日本国文部科学省、在インドネシア日本大使館など後援。2014年8月22~24日、イナ・グラント・バリ・ビーチホテル、ウダナヤ大学(インドネシアのバリ島)。

(7)包聯群、「少数民族の言語教育教材の開発について—満洲語を事例として—」、「第九回中国社会言語学国際シンポジウム及び第五回全国教育教材言語シンポジウム」、2014年7月20~23日、新疆師範大学国際文化交流学院会議室(中国・ウルムチ市)。

(8)包聯群、「危機言語満洲語—黒龍江省における満洲語継承の実態と学校教育について」、2014年3月25日、招聘講演、吉林大学公共外国語学院会議室(中国・長春市)。

(9)包聯群、「中国黒龍江省における満洲語

の実態と言語継承、学校教育について—黒龍江省三家子村を事例として—」、2014年3月3日、招聘講演、ロンドン大学・Birkbeck学院応用言語学とコミュニケーション学部会議室(イギリス・ロンドン市)。

(10)包聯群、「中国黒龍江省における満洲語の実態と学校教育の現状」、科学研究費補助金 基盤研究C(代表 包聯群)主催 多言語研究会共催。首都大学東京国際会議室(東京・八王子市)、2013年12月9日。

(11)包聯群、「満洲人の言語と文化—黒龍江省における三家村を中心に—」、(中国)全国サマー集中講義—言語学講座(2013年6月16日-25日)、中国言語戦略研究センター/南京大学文学院主催、招聘講座(19日)。南京大学文学院講義棟(中国・南京市)。

(12)包聯群、「黒龍江省における満洲人の言語と文化の継承実態」(科学研究費補助金 基盤C)、学術振興会主催 海外学術調査フォーラム、2013年6月29日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(東京都・府中市)。

(13)包聯群、「中国黒龍江省富裕県における満洲語の現状と課題」、「満族歴史研究会第27回大会」、2012年5月25日-27日、長崎外国語大学会議室(長崎市)。

〔図書〕(計 2 件)

(1)包聯群編著、『現代中国における言語政策と言語継承』第2巻、2015年7月。三元社(予定)。

(2)包聯群編著、『現代中国における言語政策と言語継承』第1巻、2013年8月。三元社。

6. 研究組織

(1)研究代表者

包聯群 (BAO Lianqun)

大分大学 経済学部経済学研究科 准教授
研究者番号：40455861

(2)研究分担者

風間伸次郎 (KAZAMA Shinjiro)

東京外国語大学 大学院総合国際学研究所
教授

研究者番号：50243374